

学会ニュース

目次

・ 2017年度学会費納入のお願い	1
・ 第39回大会および第40回大会について	1
・ 2017年国際18世紀学会 執行委員会報告（隠岐 さや香）	1
・ 代表幹事退任に当たって（長尾 伸一）	3
・ 代表幹事就任に当たって（小田部 胤久）	4
・ 事務局より	5

2017年度学会費納入のお願い

代表幹事 小田部 胤久

学会費未納の会員の方については払い込み用紙を同封いたしましたので、年会費の納入をお願いいたします。年々、会計状況が厳しくなっております。活発な学会活動の維持と発展のため、会員の皆様のご協力をいただきたいと思います。

第39回大会および第40回大会について

今年度の第39回大会は、2017年6月24日（土）、6月25日（日）に立教大学で開かれ、盛会のうちに終了しました。開催校責任者の坂本貴志会員をはじめ、立教大学の方々に篤くお礼申し上げます。

共通論題「コスモポリタニズムの歴史的文脈」および「世界の複数性」の発表者の方々、コンサートの出演者の方々にもお礼申し上げます。

来年度の第40回大会は2018年6月に京都大学で開かれる予定です。開催校責任者は王寺賢太会員です。詳細は追ってお知らせします。

2017年国際18世紀学会 執行委員会報告

隠岐 さや香（名古屋大学）

国際18世紀学会（英語略称ISECS、仏語略称SIEDS）による恒例の執行委員会（Executive Committee meeting）が2017年7月16日から7月20日にかけて、エディンバラ大学にて開催された。各国の18世紀学会から選挙で選ばれた役員と、日本も含めた各国の18世紀学会（national academies）

からの派遣委員が30カ国以上から40名ほど集まった。筆者は前任者のあとを引き継ぎ、日本18世紀学会からの派遣委員（国際幹事）として参加した。

以下、2019年の国際大会参加に多少は関係のありそうな実際的なことと、執行委員会で話し合われたことの報告と、二部に分けてレポートをお届けする。

（1）実際的なこと—エディンバラ大学の宿泊施設および街の様子—

一言で言えば、素晴らしくよいところだった。気候にさえ少し気をつければ何の心配も要らないので、あまり話すことがない。ただ、宿泊施設予約でやや戸惑ったのでそれについて書いておく。

エディンバラ大学はEdinburgh Firstという関連会社にシンポジウムや学会の宿泊施設予約業務を委託している。恐らく大会の時は同社のHPリンク (<http://www.edinburghfirst.co.uk/>) をクリックして宿泊予約をする方が多いはずである。同HPはいわゆる宿泊予約サイトと同じで、紹介される宿はビジネスホテル並のものから学生寮まで多様である。また、大会会場となるキャンパスからの距離も様々である。この選択で少し戸惑うかも知れない。

私はその時一番安そうだったRichmond Apartmentsに泊まったが、ここは会場まで徒歩数分で、観光の中心地となるメインストリートも徒歩圏内という最高のロケーションだった。部屋の設備もキッチン、トイレとシャワーがついていて素晴らしかった。室内のお掃除もあり、ゴミも一週間に二回くらいは捨ててくれる。ただし、雰囲気は完全に学生寮だった。他の階の居住者は若い学生たちで、廊下でもよくすれ違う。好みは分かれるかも知れない。

Edinburgh Firstならびに宿泊施設のスタッフは基本的に皆フレンドリーだったが、事務には細かいミスがみられた（私の場合、予約の最終確認メールが来なくて問い合わせねばならなかった）。ただし顧客からの要求にはチャットでも対応してくれるなど、機動力はある。何かあればHPを開くとよい。

（2）執行委員会に参加して

執行委員会開催責任者はNorthumbria大学のBrycchan Carey氏であり、氏は2019年にエディンバラで開催される国際18世紀学会大会の実行委員会メンバーでもある。そのため、今回の執行委員会にはその予行演習的な意味合いもあった。詳細は後に送付される議事録をご確認いただければと思うが、会議においては会計状況、各国18世紀学会の動向、ISECSのウェブ運営、出版企画など多様な議題が話し合われた。また、別日程で研究発表会や2019年の大会を想定してのエディンバラツアーなども行われた。

執行委員会は基本的に英仏二言語が公用語である。会議には同時通訳も同席し、どちらの言語でも自由に話の出来る環境となっていた。西欧と北米（主には米とカナダ）からの委員は基本的に自在に両言語を操る場合が多かったが、東欧の委員は仏語優勢（世代によっては仏語のみ理解）、他の地域の委員ならびにエディンバラ大会実行委員関係者は英語のみが共通語となるため、これは現実的な判断であろう。

一つ大きな話題となったのは中国の動向である。中国の18世紀学会は会長であったHan Qi氏の死去と共に連絡が途絶えていたが、今回、後継組織の設立を試みている若手研究者のWen Jin氏（華東師範大学）がオブザーバーとして参加し状況説明を行った。

氏の説明によると、先の学会は創設者個人の存在に依拠するところが大きく、責任者の死去と共に学会が消えざるを得なかった。再度設立するには行政による複雑な許認可手続きが必要となったという。中国では政策的優先度により学会の「レベル」が設定されており、残念ながら18世紀学会の優先度が高いとは言えない。そのため手続きには時間がかかっているとのことだった。ただし、既にWen Jin氏の周りには文学系を中心に数十名ほどの若手、中堅研究者が集まっており、2018年の春には研究会も企画しているという。

2019年のエディンバラ大会については、既に英国18世紀学会（BSECS）のサイトに簡単な紹介ページが出来ていると告知があった（<https://www.bsecs.org.uk/isecs/>）。2018年1月からは発表公募も含め、よりインタラクティブで具体的な情報を掲載していくという。なお、「通貨が弱い」国の研究者の渡航費用を援助する助成金を同大会でも用意する予定であるが、あわせて各国18世紀学会に対して、自国の若手研究者への助成なども用意するよう（＝ISECSの負担を軽減する努力をするよう）働きかけることが提案された。

この他、インド18世紀学会による国際18世紀学会への加盟（執行委員会への委員派遣含む）や、複数地域・国家をまたがる地域研究組織としての「南東欧18世紀学会」との連携（各国学会とは違う扱いとなり、委員派遣は含まない）なども話し合われた。

ISECSへの加盟料支払いの手段についても話題となった。経済的に苦しい国にとっては海外送金の手数料が高額であることが問題であり、ペイパルなどを用いることが出来れば最善であるが、現在のISECSが依拠しているOxfordの口座がそのサービスを利用するのは手続き上難しい。代替案として、クレジットカード決済を導入している一部の各国学会（仏18世紀学会など）が仲介し、まとめてISECSに上納することなど提案されたが、細部については今後一年かけて話し合うとされた。

大会の他、若手研究者育成を主眼とするSeminars for Early career scholarsが毎年開催されているが、この研究会については、引き続き若手への旅費援助等を行っていくことや、各国で若手に働きかけを行っていくべきことが確認された。今年は9月中旬にカナダのモントリオールで開催された。来年はイタリアのヴィテルボでやはり9月頃開催の予定である。ただし、現時点では募集要項は出たものの、旅費の援助については交渉中のようなのである（詳細は本学会HPにアップロードされたpdfを参照のこと）。

代表幹事退任に当たって

長尾 伸一（名古屋大学）

会員の皆様、幹事の皆様、事務局を務めていただいた方々のご協力をいただき、この度なんとか無事に二期務めさせていただいた代表幹事を退任することとなりました。皆様にお礼を申し上げます。

現在の勤務先でも日々感じることですが、人文系の学問を取り巻く大学の環境はますます厳しくなっています。この傾向はしばらく続くと思われますので、研究の維持と発展のために、学会が知恵を絞って支えていく必要が高まっています。

しかしそれは18世紀研究の意義がなくなったことを意味するとは思えません。冷戦が終わった時には、これからはグローバル経済の下で自由民主主義が支配する、一元的な世界になるという議論がありました。21世紀に入ってしばらくたった現在、どうも歴史はそのような形で進んでいくのではないように見えます。19世紀から20世紀までの狭義の「近代」を見直して、今世紀が抱える様々な問題をめぐる新しい人類的な合意を形成することが求められていると思います。そのためには、現代の思想的、文化的出発点となった啓蒙の遺産目録を作り直し、何を捨て、何を見直し、何を継承すべきかを検証する作業が急務です。とくに非西洋世界の中で厚い研究の蓄積を持つ日本の18世紀研究は、この過程で重要な役割を担っていくことになるでしょう。

それを支えるためにも、アジアで最大の学会である日本18世紀学会の発展が期待されます。専任教員の方ばかりでなく、18世紀研究をされていらっしゃる様々な方々が協力して、本学会の特長であるサロンの雰囲気の中で楽しく研究ができる環境を維持し、発展させることができることを願っております。在任中は十分なことができませんでした。今後とも、学会の発展のために少しでも役に立てればと思っております。

代表幹事就任に当たって

小田部 胤久（東京大学）

このたび8年ぶりに代表幹事をお引き受けすることとなりました。

8年といえば、長くもあれば、短くもある期間ですが、その間を振り返るに、18世紀にかかわる研究環境の激変に改めて驚かされます。私が念頭に置いているのは、書籍の電子化です。近い過去のことほど記憶は曖昧になるともいいますので、記憶の糸を可能な限り正確にたぐることにはしましょう。

フォルダーを調べてみますと、私が最初に google books をダウンロードしたのは2008年8月のことでした。その書物とはヘルダー（1744-1803）の『人類歴史哲学考』の英訳版で、ヘルダーがなお存命中の1800年に出版されたものです。なぜこの書物をダウンロードしたのか、今でははっきり思い出せませんが、おそらく自分の論文を英訳していて必要になったのでしょう。その後、どれだけ google books にお世話になったか、わかりません。多くの会員におかれても同様かと思われます。

私は主として18世紀後半のドイツ語圏の美学理論の研究に従事していますが、大学院で学んでいた頃、Olms 社による復刻や Aetas Kantiana の刊行で急に世界が開けたことを覚えています。Olms のカタログを見ながら研究仲間と、こんな本がある、あんな本がある、と興奮して語り合ったものです。しかし復刻された書物の量はたかがしれています（かつ、ほとんど常に最終版が復刻されていて、一体初版ではどのように記されているのかわからないもどかしさがありました）。1987年から88年にかけてドイツに留学しましたが、ドイツのあちらこちらの図書館を訪ねては、蔵書目録をめくるのが楽しみでした。哲学の坂部恵先生から、演習の参考資料としたいのでマイヤーによるバウムガルテン『形而上学』の独訳のコピーがほしい、という依頼があり、microfilm を日本にお送りしたことも懐かしい思い出です。ところが、このように苦労して探し出した資料も、今では自宅にいながら瞬時に読むことができます。多くの場合は（あまり正確ではないとはいえ）検索機能も備わっています。かつての研究がまずは文脈を読むことに力を注いでいたとすれば、最近の研究には、キーワードをもとに文脈を超えて点と点を結びつけるようなものも増えてきました。書物の電子化は研究のあり方をも変化させています。

先日もこんなことがありました。ヘルダーの『カリゴネー』（1800年）を最新のフランクフルト版著作集で読んでいたときのこと、Wirkungen zeigen vom Werk という一節にぶつかり、この奇妙な zeigen という動詞はもしかして zeugen の誤植ではないか、とふと思い（実際この最新の版本にも誤植はあります）、これまでの版本を調べてみますと、初版（これは日本でも6つの大学図書館に収められていますが、今では電子化されています）もズブハン版全集（これは実際に所有していますが、すでに電子化されています）も zeigen でしたが、1830年および1853年の著作集（どちらも電子化されています）では zeugen と印刷されていることが判明。初版以来の誤植が残ってしまったのだろうか、と思った瞬間、急に zeigen に zeugen の意味があるのでは、と思いつき、グリムのドイツ語辞典を引いてみると（ちなみに、これまた電子化されており、かさばるペーパーバック版は数年前に処分しました）、その予想は当たっていました。このことがわかるまでにかかったのは10分ほど。机から離れる必要もありません。10年前ならば、これだけ調べるのに、あちらこちらに出向く必要があり、優に一日はかかったはずです。

おそらく18世紀研究者こそ、こうした電子化によって多大の恩恵を被っているのでしょう。そのことは18世紀という時代の特殊事情とかわかります。というのも、17世紀と比べて、18世紀は書物の一般化が格段に進んだ時代であって、大量の書物（さらにはパンフレット）が印刷されましたが、近代的な学問体系が19世紀に確立すると、それ以前の書物は急速に忘れ去られてしまったからです。書籍の電子化は、眠っていた資料の宝庫の扉を開いてくれました。

さて、それではこの宝庫とどのように付き合うのか。この点に関していえば、研究者共同体のなか

で自らの考えを鍛えていくしかなく、実は昔とさして変化はないように思います。日本18世紀学会は、一方で『百科全書』研究、他方でイギリスを中心とする経済思想史・社会思想史を両輪としつつも、さまざまな学問領域、研究方法を包含するものであって、毎年の大会はこの膨大な宝庫への最良の道しるべといえます。「共通論題」の報告・質疑応答に私もどれだけ蒙を啓かれたか、わかりません。さらに、未だなお「西高東低」（つまり西欧中心主義）の傾向の強い国際18世紀学会と比べ、日本18世紀学会は、先輩方のお蔭で、18世紀における東西の交流を描き出すことに成功してきました。

このたび、長尾伸一前代表幹事から事務局を引き継ぎましたが、経済思想史を専門とされる長尾会員は、「世界の複数性」を軸に独自の視点から東西の交流を論じられるとともに、学会活動ではとりわけ韓国18世紀学会との交流に努められ、さらに学会事務に関しても事務の簡素化・効率化を推し進められました。まさに三面六臂のご活躍で、その後を引き継ぐのはとても気が重いのですが、先輩方が築かれたこの学芸共和国がさらに発展するよう、そして、2年後に次期代表幹事に事務局を無事引き継げるよう、気を引き締めて参ります。今日の大学（とりわけ文系学部）の置かれた状況は厳しいのですが、今期幹事会より、長尾前代表幹事のご提案で、各幹事がそれぞれ少なくとも一つの実務に携わるという体制ができあがり、幹事会が一体となって事務を遂行いたします。なお、実際の事務作業は研究者の卵でもある若い大学院生が担当いたしますので、温かく見守ってくだされば幸いです。



事務局より

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。なお、口座番号は以下の通りです。

<郵便口座振替で振り込む場合>

口座記号番号：00800-7-183350 口座名称：日本18世紀学会事務局

<銀行等から振り込みする場合>

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金 口座番号：0183350

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。

- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局までお申込み下さい。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りです。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

寄付のお願い

前号以来、以下の方から寄付がありました。お礼申し上げます。

福田喜一郎会員	5口	5,000円
計	5口	5,000円

また寄付を希望される方は、別紙要領をご覧ください。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。これまで

メーリングリストより配信されていたにも関わらず最近メールが届かないという方、またご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順): 出羽尚(ウェブ担当)、王寺賢太(国際学会執行委員)、大石和欣(大会担当)、
隠岐さや香(国際幹事、広報担当)、小田部胤久(代表幹事)、川島慶子(ダイバーシティ担当)、桑
島秀樹(年報編集担当)、小関武史(学会ニュース担当)、斉藤涉(大会担当)、坂本貴志(年報編集委
員長)、武田将明(大会担当)、玉田敦子(年報編集担当、広報担当)、長尾伸一(韓国学会交流担当)、
馬場朗(事務局長、会計担当)、逸見龍生(大会担当)

会計監査: 井上櫻子、川村文重
事務局委員: 山口沙絵子、杉野駿

日本18世紀学会ニュース 第85号 2017年9月発行
発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部胤久
事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学文学部美学芸術学研究室 日本18世紀学会事務局
e-mail: jsecs@u-tokyo.ac.jp
tel: 03-5841-3769
fax: 03-5841-8958
<http://www.gakkai.ac/jsecs/>